

## 注釈<sup>1</sup>

### ジャン＝リュック・ナンシー

(訳＝伊藤潤一郎)

<sup>1</sup> 以下のテキストは、「文学と哲学」のセミナーのために書かれたものではなく、またそもそも出版を意図して書かれたものでもなかった。しかし、セミナーの作業のある一点において、このテキストはそこでの討議に適しているように思われた。セミナーでは、バタイユのテキストへのアプローチという問題が、「科学」的アプローチの支持者と、その反対に「文学」というイデオロギーに頼っているように思われる人たちの討議に閉じ込められてしまっていたのだが、この一点において、したがって——もう一度言おう……——「科学」と「形而上学」が衝突していた点において、このテキストがその討議に適している、あるいはむしろその討議を乗り越えるための努力に適しているように思われた。したがってこのテキストは、その場で付け加えられた結論とともに、セミナーのある回において読み上げられた。その結論は、実際のところ、このテキストを出発点とする文学についての理論的な論述の始まりであり、この論述は今後展開されるべきものとしてとどまっている。

ほとんど出版に適さない特徴をもつにもかかわらず、このテキストはセミナーで読み上げられたままの形になっている。ここでは単に、このテキスト——中立的な意味で秘教的なテキスト——が暗示的にしか用いていないレフェランスを示すだけにしよう。このテキストの総体は、ジャック・デリダの思考に対する注釈に捧げられている。その注釈は、デリダの思考それ自体に対する注釈であり、また『テル・ケル』グループによるデリダの思考の反復に関する注釈であり、弁証法的唯物論者と自らを形容するエピステモロジーの側からの（より詳しく言えば、アラン・バディウのテキストにおける）デリダの思考に対する批判に関する注釈である。それによって私たちはジャック・ラカンをも参照するように導かれる。したがって、問題となっているのは、理論的企てが形而上学の彷徨を乗り越えると主張するのだが……事によるとその企てが、形而上学をその円環性において完成させることにしかならないような領野についての手がかりなのである。ちなみに、結論部での倒錯という概念の使用については、ここに同じく出版されているジャン・ペラの発表を参照して理解されたい。

(科学と哲学がもつ、隣接関係、そして／あるいは分節関係、そして／あるいは排他的関係の——決定不可能な？——曖昧さについて。いずれにせよ私たちの雑誌の概要として。)

「その時、彼らは闇の幕を織り上げ、  
 〈虚空〉の周りに大きな柱を建て、  
 それらの柱に黄金の鉤をつけた。  
 無限の労苦とともに、〈永遠なるものたち〉は、  
 ヴェールを織り上げ、それを〈知〉〔Science〕と名づけた。」<sup>2</sup> (ブレイク)

### I. 方法<sup>3</sup>

形而上学は閉じている。哲学はこの閉域を歩き回るのに疲れ果てている〔s'épuise〕。

---

〔訳注〕この原注でナンシーが言及しているように、このテキストはストラスブール大学の「文学理論」のセミナーで発表されたものであり、当該セミナーの1968-1969年のテーマは「哲学と文学」だった。本稿が掲載された『ストラスブール大学文学部紀要』は、その記録集となっている。参考として以下に紀要全体に対する注記を訳出しておく。

〔注記——以下のテキストは、「文学理論」のセミナーの諸契機であるが、これらは意図的に散乱したままにされている。このセミナーは、学部の五つの研究院に属する教員と学生、中等教育教員数人によって組織されたものである。1968-1969年のセミナーは、「文学と哲学」をテーマとした。セミナーは、研究発表とテキスト（ジョルジュ・バタイユの『不可能なもの』）への集団的注釈を交互に行う形でなされた。

ここに刊行される論考は、時系列の順に配列されている。注釈の断片が、より理論的な装いのテキストのただ中にあるのはこのためである\*。

当セミナーは、この出版が可能となったことに対して、出版部長と運営委員会に感謝の意を表す。

\* 私たちは、幾人かが言及しているJ.-Cl. ピカールの論考（バタイユのテキストに対する科学的な注釈）が欠落していることを残念に思う。」(*Bulletin de la Faculté des lettres de Strasbourg*, 48<sup>e</sup> année, n° 3, décembre 1969, p. 139)

<sup>2</sup> 〔訳注〕「ユリゼンの〔第一の〕書」『ブレイク全著作』梅津濟美訳、名古屋大学出版会、1989年、399頁。訳文はフランス語訳から訳出したため、ブレイクの英語原文から訳した場合とは若干異なる。

<sup>3</sup> 〔訳注〕「方法」を意味するméthodeという語は、ギリシア語のμέθοδοςに由来し、さらにこの語は「道」を意味するδῶςを語源としている。それゆえこの語を、以下で繰り返し言

哲学が、閉域を歩き回る足取りを維持できず、歩き回ることを持続できないというのではない。いまだかつて哲学が自らに与えてこなかったような障害物はないのだ。

そうではなく、哲学はまさに疲れ果てることによって、その始まりから己に固有の目的、目標、運命を自らに与えてきたのだ。

したがって、哲学の枯渇〔épuisement〕は、最後＝期日〔terme〕<sup>4</sup>ではまったくない。

（自らの運命のみを目標とすること、そして運命の檻の中を歩き回るということ——これは、哲学が消し去った悲劇の遺産を熱烈に引き受けるということではないか。

熱烈に、というのはすなわち、すでに盲目であるということ、あるいは悲劇的に盲目であるということだ。さらに言えば、すでにとは、まさに生まれる前からということの意味している。

哲学者はオイディプスなのか。いずれにせよ、ある日オイディプスが真理を知ったという点を別にすれば。）

自らの内に吸収するという使命を自らに与えること。それも、疲労困憊の瞬間にある他なるものを出現させる〔faire éclore〕ほどまでに<sup>5</sup>。そしてこの他なるもの前触れや預言者はないということになるだろう——遅れを除いては何もないだろう。いかなる仕方であれこのようなことが起これば——それが起こるとして<sup>6</sup>——、

---

及される歩くというモチーフと通い合わせて読む必要がある。

<sup>4</sup> 〔訳注〕 termeという語は、「境界標」を意味するラテン語terminusに由来する。つまり、termeという語は、前段の「目的〔fin〕」「目標〔but〕」「運命〔destin〕」とは異なり、境界線上での出来事を指し示している。

<sup>5</sup> 〔訳注〕 faire écloreをここでは「出現させる」と訳したが、écloreという語は「外へ」という意味を示す接頭辞é-と、「閉じる、終える」を意味する動詞cloreから成り、このcloreは、本節冒頭で「閉じている」と訳したclosという語（cloreの過去分詞が形容詞化したもの）や「閉域」と訳したclôtureという語とともに、「閉じる」を意味する古典ラテン語のclaudereを語源とする。したがって、écloreという語には「閉じられたものの外」「閉域外」といったニュアンスが含まれる。

<sup>6</sup> 〔訳注〕「起こる」と訳したavoir lieuという慣用句は、字義的には「場を持つ」という意味である。ナンシーは、「他なるもの」が場をもち現前するということに対して留保をつけている。

それが哲学と名づけるべきものである。

出現させるほどまでに？あるいは現れるままにする [laisser paraître] ほどまでに？この二者択一を決定することができないということこそ、まさしく哲学を生み出す無力さなのだ。

それゆえに、哲学は瞬間を絶えず先送りする（哲学は時間を発明する）。哲学は、猶予期間の期日に達しようとする、それを延長する。哲学は自らとしか契約を交わさなかった。そして猶予期間とは哲学自身なのである。同の内での他なるものの先送り＝同における他なるものの退却 [Recul de l'autre dans le même]。他なるものの出現は、同に閉じ込められている（〔その同が〕 形象であれ、発展であれ、生産であれ、なんであれ。まさにここにおいて、操作の思考が議論されることになるだろう）。

したがって、ここに狡知はない。猶予期間の更新は全くの必然性によっている。むしろ何らかの異邦の（？）狡知こそが、その手段や環境として哲学を生み出したのである。

（それゆえ、私たちがいかに狡猾でないとしても、この母なる狡知を哲学と名づけないことは難しい。しかしながら、戯れに捕らわれれば、眩暈にすぐさま襲われる。哲学はそのことをよく知っている。だから哲学は新たな延期を自らに与える。閉域をなすのである。）

プラトンは言った。私たちはロゴスの欲するところへ赴く、と<sup>7</sup>。そして、長い迂回をせねばならない、と<sup>8</sup>。ところで、迂回を課すのはプラトンなのか、ロゴス

<sup>7</sup> [訳注] プラトンは『国家』で次のように述べており、これと類似する記述は『法律』などにも見られる。「われわれとしては、どこへでも議論が風のように僕たちを運んで行くほうへと、行かなければならないのだ」（『国家』藤沢令夫訳、岩波文庫、1979年、394D）。また『パイドン』では、ロゴスを真理へと至る「筏」にたとえて以下のように述べられている。「人間の言論のうちからとにかく最善でもっとも反駁され難いものを自分の身に引き受けて、あたかも筏に乗るようにこの言論の上に乗り危険を冒しつつ人生を渡りきらねばならないのです」（『パイドン』岩田靖夫訳、岩波文庫、1998年、85C-D）。

<sup>8</sup> [訳注] プラトンによれば、太陽を直接見ると人間は失明してしまうため、水に映った太陽を見なければならぬ。それと同様に、真理もロゴスを通して考えられなければならない。「言論の中に逃れて、その中で存在するものの真理を考察しなければならない」（前掲『パイドン』、99E）。つまり、ロゴスとは真理を映す媒介であり、真理へと至る迂回路

なのか。それを知っていたら大した知恵者だ。

それにしても、〔ロゴスが迂回を欲さないとしたら、〕一体なぜロゴスは迂回を欲さないのだろうか。いずれにせよそれはロゴスが何も欲さないからなのだ。ロゴスが欲するようなのは何もない（意欲 [Vouloir]、それはさらなる迂回として発明されたものである。意欲がなければ、デカルトは神となることを避けられなかった<sup>9</sup>。しかしデカルトにとっては、さらに道を進んで行くためには、神を思考し——神を遠ざけることがより適切だった）。したがって他ならぬプラトンこそが迂回を欲しているのである。そしてロゴスはこの意志の声をすぐさま聴き取る。ロゴスが、ロゴス自身に到達することも含めて、あらゆるものに対して無関心であるということは、私たちが思い当たり、警戒すべきだった事柄である（論理学はこの無関心について再び語ることだろう。論理学は哲学することなしに、それを語ることが可能だろうか）。しかし、素朴な哲学しか、狡知の中で素朴に疲れ果てる哲学しかないのだ。

Hier hilft kein Kluger,  
 das seh' ich klar:  
 hier hilft dem Dummen  
 die Dummheit selbst!  
 [ここでは賢者は役に立たぬ、  
 それは明らかなだ。  
 愚か者に役立つのは

なのである。

<sup>9</sup> [訳注] デカルトは人間が誤謬を犯す原因を「意志」による知性の限界の侵犯に見て取っている（「意志 (volonté)」と「意欲 (vouloir)」は同語源）。つまり「意志」の使用法が、完全なる存在者である神と人間を隔てるメルクマールとなっている。「それでは私の誤謬はどこから生じるのだろうか。すなわちそれは、意志は知性よりもより広範囲に広がるので、私が意志を知性と同じ範囲内に限らないで、私が理解していないものにまで押し及ぼすという、ただ一つのことからである」(*Œuvres de Descartes*, publiée par Charles Adam et Paul Tannery, tome VII, Léopold Cerf, 1904, p. 58 [『省察』山田弘明訳、ちくま学芸文庫、2006年、92頁])。それゆえデカルトは、意志を適切に抑制して使用することに人間の完全性を見出すこととなる。

愚かさそれ自体だ!〕(ヴァーグナー『ジークフリート』〔第一幕、第三場〕)<sup>10</sup>

## II. 哲学

しかしこの同じ無関心が、各人が各人において作動しているロゴスを率直に知る〔savoir〕ことができるという結果を生み出した。率直に、とは……すなわち正確な学知〔science exacte〕とともにということだ<sup>11</sup>。明証性に次ぐ明証性。Philosophia sive mathesis〔哲学即数学〕。

数学〔mathématique〕<sup>12</sup>は、ロゴスの曲がるどころなき厳格さの証しであり、ロゴスへと向かう確実で曖昧さのない道を識別しようというロゴス自身の至上の関心の証しであった。

しかし、無限の一連の明証性(あらゆる意味での理論)をもってしても、数学はつねに自らとあらゆる物事に対する無関心、没関心の証言でしかない。これは完全でほとんど馬鹿げた——そして本質的には唾然とするような——没関心なのだが、これこそがロゴスなのだ。

イデア性は、ロゴスの自己現前を無限の遅れに巻き込む。つまり、ロゴスの正確さがロゴスの自己確信よりも無限に遅れている状態に巻き込むのだ。しかし、この遅れはロゴスを完全性において表象する。つまり、真理においてロゴスを表象するのである。

数学〔mathématiques〕は完全性であり——また同時に完全性の陳腐さの印である。この世で最も公平に配分されたものであるならば<sup>13</sup>、判明とならないような完

<sup>10</sup> [訳注] 『ヴァーグナー オペラ・楽劇全作品対訳集——〈妖精〉から〈パルジファル〉まで』井形ちづる訳、水曜社、2014年、126頁。ただしヴァーグナーの原文は最終行が、die Dummheit alleinとなっており、それにしたがえば「愚かさだけだ」という意味になる。

<sup>11</sup> [訳注] エピグラフにも登場し、これ以降度々言及され本論文の主題の一つであるscienceという語には、「知」「学知」「科学」と文脈に応じて訳語をあてたが、一義的に訳語を決定しえない箇所もあることに留意されたい。

<sup>12</sup> [訳注] 現代フランス語では学問としての数学を指す場合、通例複数形でmathématiquesと表記されるが、ここでは単数形のmathématiqueが用いられている。単数形の場合は諸科学を統一するものとしての数学を意味し、ここではデカルトらの「普遍数学(mathématique universelle)」が念頭に置かれている。

<sup>13</sup> [訳注] デカルト『方法序説』の冒頭「良識はこの世で最も公平に配分されたものである」

全性とはいかなるものか。

欠落<sup>14</sup>についてのただ一つの哲学〔une seule philosophie du défaut〕<sup>14</sup>もなかった——あるいは、欠落についてのただ一つの哲学があったらうか。不可避的に、そしていかさまをすることなく（不可避的にいかさまに与することにもちろんなるのだが）、私たちはこう言わねばならない。哲学とは、欠落による哲学〔philosophie par défaut〕——あるいは哲学の欠落〔défaut de philosophie〕ではない、と（悪しき霊<sup>15</sup>はこう言うだろう。他の哲学はあるのか、と。これについては差し当たり措いておこう……）。

自らに固有の不調〔défaillances〕を示そうと欲し、それに疲れ果てるのも哲学なのである。

それゆえ結局のところ、不調のすべてを指し示すような力を哲学がどこから自らの内に保持しているのかということ告白するためには（哲学がそのような力をまったく保持していないということ告白しないためには）、哲学はいかなる不調も示してはならないのである。

したがって、閉域としての形而上学——この形而上学は自らに固有の告白をも閉域の一部とする——という解釈は、いかなる特権も持っていない。

この解釈は、いささかも形而上学についての包括的理解ではない。この解釈は、形而上学の陳腐な完全性なのである。

この完全性を生産するのは、数学的分析か。それとも形而上学的普遍数学〔mathesis〕か。神のみがそこで自らのものを見分けるだろう……<sup>16</sup>。

（*Euvres de Descartes*, publiée par Charles Adam et Paul Tannery, tome VI, Léopold Cerf, 1902, p. 1 [『方法序説』山田弘明訳、ちくま学芸文庫、2010年、18頁]）が参照されている。

<sup>14</sup> [訳注] ここで「欠落」と訳したdéfautは、次の段落に出てくるdéfaillanceの動詞形défaillirから派生した語である。日本語では明示しえないが、これら二つの語が意味上密接な関係にあることに注意されたい。

<sup>15</sup> [訳注] デカルトが『省察』で語った「悪しき霊（genius malignus）」が参照されている。「それゆえ、真理の源泉である最善の神ではなく、ある悪しき霊で、しかも最高の力と狡知をもった霊が、あらゆる努力を傾注して私を欺こうとしている、と想定してみよう」（*Euvres de Descartes*, tome VII, p. 22 [『省察』前掲、41頁]）。

<sup>16</sup> [訳注] 原文はDieu seul y reconnaîtrait les siensで、アルビジョワ十字軍に際してアル

閉域の内部へ、つねに、そして情け容赦なく再び陥るがゆえに——閉域の外部に存在するかもしれないものを決して見ることがないがゆえに、私は閉域を論じる権利を自らに与えるのだろうか。

したがって、私はあらゆる迂回を一巡りしたことになるのだろうか。それは陳腐な完全化だ……。

それゆえにヘーゲルは……彼は完成し [s'achève]、そして疲れ果てる [s'épuise]。

哲学の目覚ましい不調だけが、哲学を明らかにする。ずっと前から、みながそう信じている。まさにこのことゆえに、私たちは哲学を告発しようと努力している。

だがしかし、ひとはこの欠落において哲学を目指し、哲学に到達しようと努力しているのだ——中心=心臓 [cœur] において、その欠如に触れると思いつつひとが目指しているのは、ほかならぬ哲学なのだ。

そして、笑いについて……笑いは、笑う者を告発する。哲学の全体は、口を開いた状態にある。

穴のような心臓、そして言葉なく開いた口。これら二つのあいだ……

……二つのあいだはない。単なる鏡が対面 [face-à-face] を産出するということを発見するのに長い時間は必要なかった。けれども、心臓と笑う者のどちらが他方を映し出すのかを私たちは知らない。

(間隙がなくとも、すぐさま何らかのもの、つまり針の尖端が、鏡において結びつけられた二つの顔 [faces] のあいだに滑り込むことだろう (イメージのイメージであるイメージは混乱する)。ひとはこの企て [=鏡において二つの顔が結びつくこと] が不可能であるということを知ろうとせず、また仮にこのような企てが可能だとしても、割れた鏡、有用性なき傷という修復不能な破局について知ろうとしないのだ。

ここであれ、どこかであれ、どこであろうと、非常に重々しく切迫してくるいくつかの決定的な語を住まわせることに対する恐るべき忍耐のなさ。それらの語は、叫び、諸々の語、真なる語——しかしこの語は、真理の語であることをほとんど気につけない——ではない。熱狂は次のことにある。ひとは何も犯さないだろうが、

---

ノー・アマリックが発したとされる言葉「すべてを殺せ、神は自らのものを知り給う (Tuez-les tous, Dieu reconnaîtra les siens)」が踏まえられている。

閉域はある一点において動揺するだろう、ということに。

おそらく、ひとは単純かつありきたりに哲学素は退屈だ！と言うだろう。またひとは、その時その時の歓喜のなかで、同様の愚かさを正すことを先延ばしにするだろう。これらすべては余談である。）

厳密さへの非寛容な要求は、逆に、そのありのままの状態へと厳密な仕方では帰着してしまう。つまり、黒板から消さないでくれという〔面積を持たない〕幾何学の点の懇願へと帰着するのだ。

ここで私たちは、自らが厳密でも、精密でも、正確でもないということを知っている（私たちが知る限りにおいてだが……）。しかしまた、言葉の詩的な結集を求めるまことしやかな呼びかけが唾棄すべきものであることも私たちは知っている。

しかし厳密さが、そのイデア性において、自らが要求する中心点を排除することしかできないとしたらどうだろうか。

さらにまた、正確さが、すでにすっかり配置され完全化された知における善意〔bonne foi〕でしかないとしたらどうだろうか。

どこかで知のこの穏当な必然性を壊さ〔forcer〕なければならないとしたらどうだろうか。

もし哲学が力〔forces〕の問題（実践、てこ、政治、機械、ダンス、労働、そして身体）であるなら、哲学に猶予期間を課するのは力なのである。力が存在するのは瞬間の内ではなく——持続の内であり、この持続が、そこにおいて力が行使される戯れ=賭け〔jeu〕にしたがって力を留保し配置する。正確さがすでに与えられているために欠けているものの戯れにしたがって力を留保し配置するのだ。

猶予期間は力であり、哲学の傷〔défaut de la philosophie〕でもある。

### Ⅲ. 閉域

閉域を侵犯するという夢、閉域を力づくでこじ開ける〔forçage〕という夢（実践、機械、ダンス。これらは同じものだ……）。神話以上の何が必要だというのか。神話以外の何が必要だというのか。神話において哲学は自らの資源を受け取りつつ、自らをそこに認めるのを否定する（哲学が自らを肯定するのはこの否認によってでしかない——この否認は、無限の猶予期間の条件である）。

しかしもう一度、神話に対する否認（これは神話と同じだけ古い）に神話を結

びつけ、次のように言ってみよう。哲学による侵犯とは、侵犯を延期することである。それに対し、哲学を侵犯するということは、存在しないということである、と。しかしここでは、すべての語を代わる代わる強調し、また全体として強調しなければならない。

それゆえにパルメニデスは、存在が非存在から生じるということを全く認めないのである<sup>17</sup>。パルメニデスによる排除は、侵犯を保存する [préserve]<sup>18</sup>。つまり、侵犯を禁止し、侵犯の実行においても侵犯を秘密に保つ。このように、侵犯の実行は留保の内に保たれている。

誰も汲み取る [puiser] ことがない留保 [réserve]<sup>19</sup>——留保された留保。身振りが届くことのない前もつての留保、背後への留保は、そのような期日なき猶予期間の重要性を認識することができるだけである。起源の留保。起源において汲み取るとしたら、私たちから大地と源泉が奪われることになるだろう。

もし誰かが源泉において——つねに下流にある何らかの溜め池においてではなく——「本当に [vraiment]」汲み取るとしたら、すぐさま = 瞬間において [à l'instant]、もはや源泉はなくなることだろう。源泉というものが、自らの猶予期

<sup>17</sup> [訳注] パルメニデスは断片7で次のように述べている。「なぜならばこのこと、あらぬものがあるということは、けっして証しされぬであろう」(『ソクラテス以前哲学者断片集II』藤沢令夫・内山勝利訳、岩波書店、1997年、83頁)。また断片8では「ある」が「あらぬ」から生まれることが否定される。「どこからどのようにして生長したというのか。あらぬものから、と言うことも考えることも私は汝に許さぬであろう。〔……〕かくしてそれは、全くあるか、全くあらぬかのどちらかでなければならぬ」(同書、86-87頁)。つまりナンシーはここで、存在と非存在を截然と分割するパルメニデスの思考を問題にしているのである。

<sup>18</sup> [訳注] ここで「保存する」と訳したpréserverという動詞は、「前に」を意味する接頭辞 pré-と「保つ」「守る」を意味する語基serveから成っている語だが、語基serveは語源的にはラテン語のservus「奴隷」と関係している。つまり、ここでは侵犯を隷属状態において飼いならして、自由にさせないことが示唆されている。

<sup>19</sup> [訳注] この付近で頻出するréserveは、「留保」だけでなく「備蓄」「保護地域」など様々な意味で使われる語であるが、前注のpréserverと同じく語基serveを構成要素としていることからわかるように、手を触れずに「保つ」「守る」という意味がすべての意味を貫いている。この語によってナンシーは、起源に手を触れずに、起源を無傷のまま保持する事態を描き出している。

間を欲するのである。つまり、大地の中に常に変わらず埋まって隠されていることを欲するのだ。

（自殺の決定的な無力。「哲学とは生についての省察である……」。しかし、どのような死すべき態度にしたがうのかは後で言うことにしよう。そしてどのようにして留保がダナイデスの樽かを言うことにしよう。）

第二の言表。それゆえにヘーゲルは……。

ヘーゲルの完璧な外科手術は、あらゆる力づくのこじ開けに抗して、起源の留保を守る。ヘーゲルの円環の充溢は、そこにおいて円周の外縁〔bord externe〕となるようなものによっては何ものも存続しないことを望む。この線は湾曲している——そしてまた、環と球の古代のパラダイムにしたがって、この線は完全性においてある<sup>20</sup>——、というのもこの線は、もっぱらその内側のみ引かれるからである。したがって、内側というこの非常に脆く暫定的な観念は、その概念のモニターを維持するために、もはや反対物を持たないのである。

そしてあらゆるものが、外側の最も外にあるものまでが、否応なく中心に向かって落下する。それゆえ円環の回転においては、ただ一つのへり〔bord〕しかもたない縁〔bordure〕に沿って、諸々の形象が遠心力によって配置される。この縁から、すべての形象が中心を眼差す。そうして透き通った透明な中心は、諸形象に互いを見つめさせておく。

（ところで、何ものも背にしない形象〔figures〕<sup>21</sup>とは、見つめられた顔〔visages〕にはかならない。つまり、何も隠さない仮面だ。）

しかし、このような縁は侵すことができない……なぜなら、この縁は把握不可能

<sup>20</sup> [訳注] アリストテレスの宇宙観、天文学が参照されている。アリストテレスは『天界について』で、円環と球についてそれぞれ次のように述べている。「天はそのようなもの（すなわち何か神的な身体）であるから、それゆえに円環の身体をもち、その身体は自然本性的に常に円をなして動く」（山田道夫訳、『新版』アリストテレス全集5』、岩波書店、2013年、286a）。「形としては天は球形であるのが必然である。その形は天の存在に最もふさわしく、自然本性的に第一の形である」（同書、286b）。周知のように、このような天球と円運動に基づくアリストテレスの宇宙観が古代天文学のパラダイムを形成することとなり、この前提の天文学における転換はケプラーによってはじめて成し遂げられることとなる。

<sup>21</sup> [訳注] 「形象」と訳したfigureという語には、「顔」「表情」という意味もある。

だからだ。ぶ厚すぎるからではない。

要するに [A tout prendre] (この表現は、この縁がすべてを捕らえるから、というようにも理解される<sup>22)</sup>、縁を力づくでこじ開けること [forçage] はすでに縁自体に記されており、縁において縁の諸形象の一つとなる。その時々で次のような多様な形象が形作られる。亀裂、断絶、跳躍、自然、物、知。

ここで止めておこう。まさにこれらそれぞれの形象に縁を力づくでこじ開けることの形象が書き込まれている。形象の縁と形而上学とのあいだの弁別特徴となるのは、その力づくのこじ開けである。縁と形而上学の区別が、これら二つの用語を設定する。

この区別についての知はあるのか。そのような知があるとして、今度は、閉域なのか、それとも断絶なのか (いずれにせよ、科学が自らの願いを住まわせるのが「そこ」ではないということにはなりえない)。

閉域についての考察は、何らかの点で欠陥がある——それゆえこの考察は、自らにおいて厳密に閉域を形成することに失敗する (しかしこの点においてこの考察は、自らの場合<sup>ケース</sup>の裁判権をまったくもたなくなるだろう……)。この点とはいかなる点か。

閉域の思考そのものにしたがってこの点を述べようとするのは、この思考がそれ自体によって形而上学に制限されるのとは別の仕方<sup>仕方</sup>で閉域の思考を形而上学の中に閉じ込める可能性を、おそらくなくしてしまう (ある人々はこの可能性を非難として探し求め、また別の人々は閉域に驚くべき保証を引き受けさせつつ、意図せずにこの可能性を生み出している。この可能性はどこまで閉域に適合しているのだろうか。これは「この点とはいかなる点か」という問いと) 同じ問いである)。

この点とはいかなる点か。ある時は、それは壁の厚みである。厚みは、壁が二つの側をもっていることを意味する。したがって厚みは、一方の側を敵の襲撃や掘り崩しにさらす——さらに言えば、壁であることによって、厚みは自らに対してまず敵を生み出すのだ。

もう一方の側は、形而上学を閉じ込め、「これが……である」と言おうとした。

<sup>22</sup> [訳注] à tout prendreは、成句表現としては「要するに」「結局」という意味だが、文字通りに訳せば「すべてを捕らえてみれば」という意味になる。

ある時は、その点は巧みに張りめぐらされた薄い鉄条網である。ひとは、形而上学者がどのように自らが閉域を作っているかを判断する際に、あちこちでもう一方の側に手を伸ばしていたのだとは考えることができていない。これは象徴的な閉域であり、牛を飼うのに適した閉域である。それゆえひとは、哲学者が象徴を別様に用いることで、自らの背後——神学という背後——へと移行するのではないかと疑っている。

簡潔に言おう。自然の（あるいは歴史の）内部の閉域、あるいは絶えざる越境の主題——この主題はうまく打ち明けられていない（うまく隠されていない？）——としての閉域は、いずれにせよ上空飛行的視点から見られることで、探知されるおそれがある。しかし、このような観察様態は、まさしく閉域が用いる厳密さによってはうまく秩序付けられない。

閉域の思考はこのことを知っている。それは言うまでもないことなのだ（知っていると言いながらの方がうまくいくのだ）。

いずれにせよ、閉域の思考に注釈をつけることしか問題とはなりえない。

そしてどうあってもこの注釈は、閉域の思考に注釈をつけるという問題についての注釈でしかない。

（余談。いつの日か流行が過ぎ去る前に、ということは時間があればということだが、定式の反転が増えていることについて説明する必要があるだろう<sup>23</sup>——統語論的回文、意味論的回文、逆転といったものは、今日では修辞学の死骸が腐敗する場となっている気障な言い回しとは別のものを、おそらく時として味方している。別のものとは、閉域に——しばしば——由来する必要性である。まさしく今日では閉域にこそ、デカルトのポーム選手は働きかけるよう強いられている<sup>24</sup>。

しかし当然のことながら、光が規則的な跳ね返りによって均一に広がった空間の

<sup>23</sup> [訳注] ここで唐突に語られる「定式の反転」は、直前の二段落の記述を踏まえている。つまり、「注釈の問題」が「問題の注釈」になるといった定式が反転する事態について論じられている。

<sup>24</sup> [訳注] ポームはテニスに似た球技のこと。デカルトは『屈折光学』において、光線をポーム選手が打つ球の運動になぞらえて説明している。Cf. *Œuvres de Descartes*, tome VI, pp. 91-105. [『屈折光学』青木靖三・水野和久訳、『増補版 デカルト著作集1』、白水社、1993年、119-130頁]

無限の開け——より正確に言えば、際限がまったくないがゆえに、空間の中に閉じ込められることがまったくないような形で広がったものの無限の開け——へと遠くのではなく、自らへ向かって反射する時、光は暗くなる。もう一度別の言葉で言えば、歴史は暗くならない光という特定の科学の論述へと私たちを連れ戻すのである。ひとはそれを認めることとなる。）

しかし、閉域、縁——語をこのように変えることとは別のことを提起することがおそらく問題なのだった。概念を変えることが問題だったのか。それについて私たちはあまり知らない。仮説は次のようなものとなるだろう。概念ではない差延〔différance〕<sup>25</sup>にしたがって理解された閉域は、方法的懐疑によって、つまりむしろ閉域の閉域自身への適用によって、不可避的に差延である概念を思考すること——しかし、指定不可能な縁のへりに沿って思考すること……したがってそれは概念でも縁でもない——を試みるよう促すだろう（このようにして差延は、イデオロギーという不名誉な烙印——イデオロギーを不名誉だとする必要があるならばだが——を押す焼き鏝を免れるのだろうか）。

このようにすることで、私たちは大したことをしているわけではない——ここではすべてがユビュの発明に酷似している。

しかし、ユビュは形而上学と何らかの関係をもっている（それは螺旋的にでしかないだろう）のだから、私たちは一つの試みを行うことができる（私たちはあえて奇行しかない。それが注釈の特権なのだ）。しかし、そうするためには、このフェンシングの中で後退し、別の場所から再出発する必要がある。

<sup>25</sup> 〔訳注〕デリダは論文「差延」において、「差延」が概念ではないことを繰り返し強調している。たとえば次の箇所を参照のこと。「私が差し当たり差延という語もしくは概念と呼ぶことにするものは、後でわかるように文字通りには語でも概念でもない」（Jacques Derrida, « La différance », in *Théorie d'ensemble*, Seuil, coll. « Tel Quel », 1968, pp. 41-42 [「差延」、『哲学の余白』上巻、高橋允昭・藤本一勇訳、法政大学出版局、2007年、34頁])。ちなみに、論文「差延」は後に『哲学の余白』（1972年）に収められることとなるが、「注釈」の発表が1969年であることと唯一の原注での『テル・ケル』への言及からして、ナンシーが参照しているのは上に記した「テル・ケル」叢書版だと考えられる。

#### IV. 科学

それでは、どこから再出発するのか。科学以外にはありえない。なぜなら、概念というものが科学の概念でしかないのだとしたら、あらゆる閉域（と差異と差延）は、科学に書き込まれる（あるいは科学について書き込まれる）からである。

同様に、諸々の切断の装置全体——この装置は、閉域と〈同じもの〉として極めて明白に与えられる（これらの切断はある一つの理論 [théorie] の企てとしてまとめ [ensemble] 発表されるが、この理論はまさにこのことからして、このまとめるといふこと [ensemble] によって理論となるだろう<sup>26</sup>) ——は、科学——たとえそれが科学批判という姿を取るとしても——によってしか要求されない。

導きの糸を辿ろう。

科学に属さない科学についての言説は存在しない。

科学についてのものでない科学の言説は存在しない（こう言われるだろう。科学の内容についての言説ではないのか、と。しかしそうであるならば、言説はすでに対象の位置にあり、確立されたものの上ですでにある……）。

前者〔「科学に属さない科学についての言説は存在しない」〕は、自己への不可能な張り出し<sup>27</sup>の必然性へと際限なく巻き込まれる。つまりこれは、科学認識論

<sup>26</sup> [訳注] この箇所は、前注で挙げた論集 *Théorie d'ensemble* が参照されている。フィリップ・ソレルスをはじめとする『テル・ケル』グループとその周辺の思想家（デリダ、フーコー、バルト）の理論的テクストを集めたこの論集については、高橋允昭がデリダの『ポジション』に付した訳注で裏表紙の紹介文を訳出しているので参照のこと（ジャック・デリダ『ポジション（新装版）』高橋允昭訳、青土社、2000年、213-214頁）。そこでは、「『文学的』イデオロギーからこのイデオロギーの科学への移行」が語られている。この言い回しから明らかなように、また以下の研究が指摘しているように、この時期の『テル・ケル』はアルチュセールとラカンの理論を積極的に援用していた。Cf. Philippe Forest, *Histoire de Tel Quel, 1960-1982*, Seuil, 1995, p. 304. 阿部静子『「テル・ケル」は何をしたか——アヴァンギャルドの架け橋』、慶應義塾大学出版会、2011年、311-312頁。「科学」と題されたこの節以降の議論は、原注で示唆されていたように、『テル・ケル』グループだけでなく、アルチュセールとラカンの周辺（エピステモロジー・サークルと『分析手帖』、とりわけバディウ）を念頭に置いて展開されている。

<sup>27</sup> [訳注] 原語は *surplomb* で、建物の上部などの出っ張った部分のこと。科学についての言説は、科学の上へ「張り出し」て科学を論じようとするが、その言説それ自体も科学に属するため、このような企ては「不可能な」ものとなる。

[épistémologique]、あるいは論理認識学 [logépistémique] というジャンルである。このジャンルは、意見を変えながらも前のめりになり、そして狂乱した自己改訂へと逃避する。探究 [prospection] の領野をさらに際限なく開くために、回顧的な [rétrospectives] 革命が自身の検証作業として増大する。

この運動の根源には、「非デカルト的認識論」<sup>28</sup>という指標が見出される。次のことが理解されよう。発展と実践に対する嗜好のせいで、この「非」はそれほど確かなものではない……。

そして、もしデカルトの庇護が、科学認識論者を切断という彼らの唯一の夢において苦しめているとしたらどうだろうか。

後者 [「科学についてのものでない科学の言説は存在しない」] は、自らの対象の命題学において、そのまま確かなものとなる (この命題学においては、「主体」の多くの効果が厳密に無効化される<sup>29</sup>。すなわちそれは、科学言説の成年期である)。

これについてさらに何かを言う必要があるだろうか。これは哲学というジャンルだ……。すでにはるか昔にプラトンは、プロタゴラスに「主体」を譲っていた。さらに古くはこう言われていた。「思考することと思考されたものは同じである」<sup>30</sup>。

<sup>28</sup> [訳注] これはバシュアールの『新しい科学的精神』の第6章のタイトルである。Gaston Bachelard, *Le nouvel esprit scientifique*, 8<sup>e</sup> édition, PUF, coll. « Quadrige », 2013 [1934], pp. 139-183. [『新しい科学的精神』関根克彦訳、ちくま学芸文庫、2002年、167-221頁] そこでバシュアールは、明晰判明な直観に基づくデカルト的認識論が崩れさっていることを指摘している。

<sup>29</sup> [訳注] ここでの「主体」への言及は、バディウの議論を参照している。バディウは、『クリティック』に掲載されたアルチュセールの著作への書評において、「科学の主体についてのラカンのもっとも最近の思弁は、マルクス主義者にとって主体とはまさしくイデオロギー的な観念であるということを、私たちに隠すべきではない」(« Le (re) commencement du matérialisme dialectique », *Critique*, n° 240, mai 1967, p. 449) と述べ、ラカンの「科学と真理」とジャック＝アラン・ミレールの「縫合——シニフィアン論の基礎」(ともに『分析手帖』第1号、1966年所収)を批判している。またバディウは、『分析手帖』第10号に発表した「しるしと欠如——ゼロについて」では、「科学の主体は存在しない」(« Marque et Manque : à propos du Zéro », *Cahiers pour l'analyse*, n° 10, hiver 1969, p. 161) という明確なテーゼを表明することとなる。後者の論文については、次の研究を参照のこと。上野修・米虫正巳・近藤和敬編『主体の論理・概念の倫理——20世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ主義』、以文社、2017年、第2部。

〈科学〉に属する科学しかない。そして、〈意識〉なき〈科学〉もまた〈科学〉なのである。形而上学が閉じ込められていると言われる主観性は、いずれにせよ心理学的な主観性ではない（〈神〉でも〈人間〉でもない）。そうではなく、それは諸要素〔éléments〕がそこで生み出される境位〔élément〕なのだ。すなわち、分析の領野だ。

（心理学や心理学主義という亡霊を一掃することで厳密さを確立したにちがいないすべての人々には、〔心理学や心理学主義とは〕反対のことを信じたり語ったりするという関心はないのか——しかし同時に、それらの人々は、自らの新しい力によって評価した——理由なしにではなく？——王座によって、人間的に、あまりに人間的にも（形而上学的にも）誘惑されていたのではないか。

二人を共に過去の人とするためにヘーゲルとジャネを取り違えること……。そのようにしたならば、心理学に関して大したものに残されていない当時も今も、ヘーゲルのテキストが引き合いに出されることだろう。）

そして、この境位とは閉域なのか。もちろん私たちは閉域にいる。言説に属さない閉域はなく、閉域に属さない言説はない。これが〈科学〉と呼ばれる。頭巾をかぶった諸科学は、〈科学〉において、慣れた修道士のように頭を上げることなく活動する。

ところで、〈科学〉の王の身振りによって指し示されることで、閉域はよりよい様相を呈するようになる。閉域それ自体が身振りであり、この身振りの循環性は、限界のない力の告知によって裏打ちされている（この限界は、閉域自体が構成する限界とは異なる限界である。あらゆるものがこの限界に依存する以上、それはもはや限界ではない。ここにおいて、無傷なものとしての全体が、様々な領域で再び姿を現すのがわかる……）。

この身振りにおいて、つまりこの実践において言説は、円環をなすために、絶えず自らの真実性のしるしとなる。この真実性の円周において、言説は自らの確実性を反復することで、自らの支配権の拡大を確実なものとする——したがって、この円周はサイクロイドや螺旋となるのか（これは古いテーマだろうか。しかし、この

<sup>30</sup> [訳注] パルメニデスの断片3のこと。「なぜならば、思惟することとあることは同じであるから」（『ソクラテス以前哲学者断片集II』前掲、79頁）。

テーマを再び流行させているのはここでの私たちではないのだ!)。ここにおいて閉域は領域〔*domaine*〕<sup>31</sup>となり、またそれゆえに権力〔*pouvoir*〕となる。

権力とは、力づくの侵犯である。権力が侵犯を行うとは誰も言わない。学者はこのことから目を背ける。しかし、それが学者のテーマであることは避けられない。権力は法以前にある。権力は、自らの領域の境界線を越えることができないなければならない。領域は、自らの拡張を含意している。科学は、塹壕作戦を知らない。科学は絶えず斥候〔*reconnaisances*〕<sup>32</sup>を派遣する。

結局のところ、〈科学〉の閉域は、諸々の切断の前線、つねに動いている前線にほかならない——敵陣突破、橋頭堡、占領部隊、領土の再編。これが概念の労働〔*travail*〕だ。

内側のどこかに形而上学の閉域は書き込まれる。閉域は素早く取り囲まれる。そうしてできるのは博物館か、ゴミ捨て場か。

操作的 = 作品形性的〔*opératoire*〕<sup>33</sup>になるために、科学は自らが働きかける〔*travaille*〕閉じられた〔*clôturée*〕(科学によって閉じられた)イデオロギーから離れるだろう。

しかし、作品〔*œuvre*〕へのいかなる欲望が、科学に働きかけているのだろうか(それが〈偉大な作品〉への欲望でないとしたら)。

そうであれば、閉域とは科学が自らの背後で閉じるものことになるだろう。科学はどこへ向かうのか。科学へ向かうのだ……。

閉域を閉じるという企ては、それが閉域そのものに由来するのでないとしたら、どこから生じうるといふのか。

<sup>31</sup> [訳注] 学問などの「領域」を意味する *domaine* という語は、語源的には「支配」や「所有」を意味するラテン語 *dominium* に由来し、権力関係を含意している。

<sup>32</sup> [訳注] 「斥候」と訳した *reconnaissance* という語は、ヘーゲル哲学における「承認 (Anerkennen)」の仏訳語でもある。この周辺のナンシーの論述は、「承認」「労働」「作品」といった語を強調することで、エピステモロジーの議論にヘーゲル弁証法を重ねていることに注意されたい。

<sup>33</sup> [訳注] *opératoire* と次段落の *œuvre*、次節冒頭の *opération* は、ともにラテン語の *opera* を語源とする単語である。これらの語には、エピステモロジーが論じる「操作」と、ヘーゲル哲学における労働による「作品」形成の双方の意味が含まれている。

## V. 論理学

操作〔opération〕は、自らを欠如させる〔se manque〕。しかし、それは操作が告白することなのだ。論理学において、ロゴスの無関心さはロゴスの決定不可能性となる。

しかし、操作がこのように告白したがるのは、この欠如をそのものとしては否定するためでしかない。指定不可能なこの欠如は、自らを欠如させ、自らを無効化する（ところで、ゼロとは……円環ではないのか）。ゲーデルの定理は、一切のノスタルジーなしに表明されねばならない。しかしながら、差異についての科学、自らの差異についての科学である科学は、自らから差異化することがまったくないだろう。これは、〈科学〉という形而上学による否定なのか、あるいは恐るべき否認、否認を行う科学それ自身のための恐るべき否認なのか。

最初の指定を行うことに関する無能力は、論理によっておのずから排除される。そうすることで、この排除（あらゆる原初性、あらゆる差延）の過程において完全化がなされる。この無能力には、やはり（またまさに否認によって論理学者が恨みを募らせつつも）、最も伝統的で執拗なものである基礎という考え方の明晰に曖昧な——つまり明晰に盲目な——特徴があるのではないか。

とりわけ、神秘主義という特徴があるのではないか——信の一貫性〔constance〕が操作的な定項〔constantes〕に置き換えられるかもしれないが。

しかし、論理学者はゼロを書き込むことで、自らが用いるしるし〔marque〕は無効化に対する無能力を無効化するのだと言い張る。かくしてすべてがしるしを抛り所とするようになるとき、形而上学的真理からしるしは取り去られたのだろうか。むしろ、このエピステモロジーというケシの操作力〔virtus operativa〕が、どれほど古い香りを発しているかが感じられるのではないか。

あらゆる神秘主義が巧妙に隠されることで、過程から成る科学の必然性は、私たちをエピステモロジーという技術の糸車に連れ戻す。この技術の全体は、もう一つ別の同一的な形而上学の天空——唯物論の天空——を抛り所としている。

切断であるからには、形而上学の閉域ではないからだろうか。現在なされている科学とイデオロギーの区別は、科学がイデオロギーの問いに答えることなく、依然としてイデオロギーの問いの排斥を自らのテーマやモデルにしているということも示している。これは、〈同〉のゲームだ。

「科学的な科学しかない」ということを、「イデオロギーについての科学しかない」に置き換えれば、ヘーゲルの円環から逃れることになるのか。実際、「イデオロギーについての科学」は、差異を無限へと送り返す（無限は円環である）。というのも、いかなる科学も、自らがイデオロギーになるということを告白するからである。またあるいは、ここでの科学は自らの差異についての科学であるかもしれない。それは厳密に言えば、科学は自らの〈科学〉についての差延であるかもしれないということだ。何が勝ち取られたのか、あるいは何が失われたのか。

私たちはそれを予見することができるのか（したがって、それはすでに完全に見られているのか）。

科学と科学の論理は、それらの装置において根拠づけられて、自らの道を進む——そうしてそれだけ、自分たち自身についての科学を先送りにするのだ。あるいは（しかしこれもまた同じことなのだが）、自らの基礎を欠くように根拠づけられることで、科学と科学の論理は、あらゆるものが書き込まれるところに再度書き込まれるのかもしれない。あらゆるものが書き込まれるここにおいて、形而上学と物体〔corps〕（すなわち、あらゆる操作の場——しかし、それはあらゆる知の猶予期間である）は、絶えず苦しめ合い、諸過程が征服によって得る安楽さをともに絶えず妨げるのである。

科学はこの物体を、生命体のモデルにおいて、つまり諸々の欠如の埋め合わせのモデルにおいて占有する。この物体は、絶えず死ぬほどに自らを書き込む。乗り越えることができない、不可能な形而上学。

ひとは、折りたたんだり広げたり、散乱させたり階層化したりすることがいつもできるわけではない。迂回があるのだ。いつの日か、まさに書かねばならない。

けれど、書くことは苦しませるものであり、また不如意なものである。（少なくとも注釈にとってはそうなのだ。注釈は口ごもり、あるテキストの猿真似をする、注釈はこのテキストであることはできず、注釈はこのテキストの科学でもない……。しかしこのテキストはどこにあるのか。）

## VI. 欲望

閉域。閉域についての考察が、複数の閉域を区別できず、それらを分離できないことが望まれるだろう。より正確に言えば、科学の生産的な操作という名のもとで

の閉域の二重化（つまり、差延、切断の前線）は、この二重化がそうであるところのものとして、つまり「つねに」形而上学自体の身振り——閉域の内部から〈現前〉に挑戦するのだが、閉域によって形而上学から排除される身振り——として認められることが望まれるだろう。

この挑戦の中にある科学しかない。これが〈科学〉だ。しかし、閉じた領野のなかにしか挑戦は存在しない。これが諸科学だ。

たしかに、形而上学にとって、閉域についてのこの再考察には何の特権もない。

特権化されているのは、ただ真理（？）だけだ——この欠如ではなく、ただ一つのへり〔bord〕しかもたない縁〔bordure〕が特権化されているのだ。久しく前から超過されている閉域が、つまり過剰そのものである閉域が、この縁から私たちに巻き付いている。ひとは次のように言おうとする。過剰そのものによる閉域においては、自らの〈現前〉によって超過された形而上学は、自らに欠けている起源からすでに、名なき不調〔défaillance〕において枯渇しているのだ、と。

科学の過程の完全化とは、この眩暈の厳密さなのだ。

〈科学〉とは、形而上学によって自身の不調の代わりに欲望される名である。それは、名を持たぬもの名——すべての固有名の固有名、すなわち哲学に欠けている〈固有なもの〉の名である。そして、この名が欠如しているということが哲学なのである。かくして科学は、この欠如がつねにすでに自らの固有名であるような結果＝効果〔effet〕を与える場である。しかし、それはつねにすでに抹消された名である——そしてここに、抹消の原理、科学のすべての生産における科学自体の抹消の原理がある。

閉域は欲望の閉域である。

欲望は閉域の欲望である。

このようにして、すべてが再開し、かつすべてが差異化する。

（セミネールのための結論）

以下のように定義することで、セミネールを終えよう。あらゆる科学は、自己についての知であり、この知の欲望があらゆるテクストを出現させ、支え、構造化し

ているのだが、それはこのテキストがこの欲望の書き込み〔*inscription*〕であり、それゆえこの「科学」の差延である限りでなのだ。

別様に言えば、つまり同様に言えばこうなる。科学はそれ自身の差異である。科学には自らを欠如させるという特性がある。

したがって、欠如させられ、欠如している倒錯者、またこの欠如のしるしである（しかししるしが欠如する限りで。しるしをつけることとは欲望することだ）倒錯者（倒錯があるならば、それは欠如の魅惑である）は、文学とも言われ、とりわけそう書かれる。

いずれにせよそれは、バタイユの問いにしたがってなのだ。そこでバタイユは自らの「作家としての意識」と同様に「自らのテキストの科学」を言表する。

「書くのか。爪を剥がし、解放の時をむなしく期待するのか。」（『不可能なもの』30頁<sup>34</sup>）

Jean-Luc Nancy, « Commentaire », dans *Bulletin de la faculté des Lettres de Strasbourg*, décembre 1969, pp. 189-198.

Reprinted by permission of Jean-Luc Nancy

訳 = 伊藤潤一郎（早稲田大学文学研究科博士後期課程）

<sup>34</sup> 〔訳注〕 Georges Bataille, *L'impossible*, Minuit, 1962. [『不可能なもの』 生田耕作訳、二見書房、1975年、39頁] ナンシーは2016年に発表されたバタイユについて的小論で、この一節を「他のいくつかの一節とともに、40年来諳んじている」ものだと述べている (Jean-Luc Nancy, « Bataille par cœur », *artpress* 2, n° 42, 2016, p. 32)。